安達太良山

毎日新聞旅行　　11・12 日

安達太良山へ登るのは 19 回目である。学生時代に所属したワンダーフォーゲル部の山小屋がこの登り口の一つである塩沢温泉にあるので、30 歳前後の頃は後輩たちと一緒に正月は常にこの山で迎えた。頂上近くにあるくろがね小屋には温泉もあるので、雪山に連れて行って下さいなどといわれると、この山にしたことが多いので登った回数も多くなった。そんな理由であるので、登ったのは大半が冬季である。3 年前にも毎日新聞旅行の主催する安達太良山にエントリーしたのであるが、猛烈な風のためロッジまでは行ったのであるが一歩も前へ進むことができなくて撤退したことがある。という訳でヒマラヤのゴーキョピークに登った時に一緒であった竹内英子さんと 2005 年 2 月に山岳デートとシャレ込んだ時以来ということになった。あの時は快晴無風のデート日和であった。

集合場所の東京駅新丸ビル前に行くと、いつもよく合う S ノさんと F ｼﾞﾀさんがいるのでまた会ったなと思ったら別のコースに行くという。今日は知り合いは無しかと思ったら、途中のバス休憩所でフルート奏者の S ゴウさんから声をかけられた。百名山狙いの彼女はこの山にはもう登っているだろうと思ってそのことを聞いてみたら、雪の安達太良山に登りたいから再度来たという。すでに 82 座登ったということであるが、このような人は 100 名山達成した後でも山登りを続けることであろう。2015 年 3 月の蔵王以来だ。他にもジイサマで「以前会いましたネエ」と声をかけられた人がいたが、こちらは覚えていない。土

日で祭日がらみということでいつもよりは少しだけ年代が若かった。バスの中での話題が、原発問題を「若狭では何シーベルトだから」などと具体的な数値入りで話している人や、「明日は年休を取って洗濯とか買い物をしなきゃあネ」などといった話が聞こえた。男 15 人に女 8 人の合計 23 人という大所帯だ。

ツアーリーダーは 3 年前に中止になった時と同様に花岡さんに、押田さんが今回はメインリーダーである。これに東北のガイド組合の重鎮である近藤さん。いつもは、山頂ではこう言いましょう。「サンチョー・ベリマッチ」などとバカなことばかり言う人だ。

さて山の方は、初日は晴れてはいたが風が強く安達太良山の山頂は見ることができなかったが、くろがね小屋まではまあまあのペースで着くことができた。今年は雪の量が結構多いようである。くろがね小屋は多少混んではいたが、23 人＋3 人という団体がいる割には、連休としては余裕があった。一人一組の布団が与えられたが夜中は寒かった。登頂日は、前日と同様に晴れてはいるが風が強いというここでは当たり前の天気であった。朝の出だしからつまずいた。くろがね小屋の写真を撮ろうと思って早目に外に出たのであるが、ストックをセットしようと思って伸ばしたらセットしたいところで止まらない。前日の雪が付いたままで閉まったのでストッパーが効かなくなってしまった。レキ製のストックではよくあることだ。ストックはバラバラにして保管しなければいけないということは解ってはいるが、小屋の中でそんなことできないよ。何とか解決は付いたが他の出発準備がおろそかになってしまって後でひどい目にあった。スノーシューの締め付けが甘かった。登っている途中で左足が外れてしまった。応急で履きなおしてそれ以降登ったが今度は左足の方が外れかかってしまったがごまかしながら何とか頂上までは行った。頂上でセットし直すつもりでいたが、風が強いので「写真を取ったらすぐ出発します」との近藤ガイドの一声で直す時間が取れなかった。山頂標識の裏にもっと高いところがあるが誰も行かなかった。降りの方が足元の動きが大きいみたいで、歩きだしてすぐに両足ともスノーシューが外れてしまった。押田さんに手伝ってもらって履きなおしたがピッタリ来ない。この冬山用の靴とスノーシューですでに何シーズンも雪山をこなしているのに、この日のように多少締め付けが甘くても、何とかなっていたのに今回は上手くいかない。雪が重いのでテキトーなやり方では対応しきれないようだ。山経験年数が長いだけでちっともベテランらしさが身についていない欠陥がもろに出てしまった。花岡さんがイライラしている様子が見て取れる。合計 4 回スノーシューのセットし直しを行ってやっと落ち着いた。

近藤さんも今回はバカなダジャレもなく、ひたすら歩いていた。出発時には「ラッセルを手伝ってください。」とみんなに声をかけていたが、花岡さんと客の 2 人位が手伝っただけでほとんど一人でラッセルをこなしていた。ちょっと見直したが、その影響かツアーにしては歩くのが速すぎると感じたが、俺が遅すぎたのかも知れない。

どうやら俺の雪山登山は今回をもって終わりにしなければいけないようだ。